(C)河北新報社

311 次世代塾 伝える／備える

第5回講座

東日本大震災で起きたことを大学生らが学ぶ「311『伝える／備える』次世代塾」の第5回講座が5日、仙台市宮城野区の東北福祉大仙台駅東口キャンパスであった。テーマは前回に続き「避難の明暗」。震災時に介護老人保健施設「リバーサイド春圃」（気仙沼市）施設長だった猪苗代盛光さん(69)と、日鉄住金建材仙台製造所（仙台市）所長だった平山憲司さん(56)が当時の証言を語り、教訓を訴えた。

想定を上回る高さの津波に襲われ、多数の犠牲者が出た「リバーサイド春圃」＝2011年7月

元リバーサイド春圃施設長 猪苗代盛光さん(69)

極限状態で犠牲拡大

震災時、施設にいた利用者133人全員が施設2階に避難した。平均年齢83歳で大半が車いす。隣の建物3階が本来の避難場所だったが、車いすの避難に時間がかかり、当日の津波情報も想定と同じ6㍍だったため高さ7㍍の2階を選んだ。

津波は2階に押し寄せ、首まで水に漬かった。必死の救助も追い付かず、47人が死亡。「誰かを助けるなら別の1人を離さないと」という極限状況だった。

火災も発生し、周囲は火の海に。恐怖と寒さに震えながら夜を明かした後、近くの中学校体育館に避難した。暖房、毛布もない極寒の環境で高齢者が次々に倒れ、12人が亡くなった。犠牲者は計59人になった。

2階への1次避難は訓練を踏まえたマニュアル通りだったが、正しい判断だったかどうか悩んだ。「想定外」への心構えが重要だ。震災関連死も繰り返してはならない。要介護高齢者らに避難所の集団生活は厳しく、配慮が必要だ。

（医療法人「くさの実会」常務理事）

元日鉄住金建材仙台製造所所長 平山　憲司さん(56)

築山避難 訓練生きる

仙台港近くの製造所は8㍍の津波にのまれた。職場にいた76人全員が助かったのは、震災前から訓練を重ね、当日も7分間で避難を完了したことが大きい。

避難先は工場の建設残土で敷地内に造った高さ10㍍の築山。騒音防止を目的とした山が高さはぎりぎりだったものの、近隣住民を含め130人の命を救った。

実は津波が来るまでが正念場だった。「帰らせて」と言う従業員が相次いだからだ。私は断固許さず、結果的に犠牲を出さずに済んだ。しかし「津波がもう少し高かったら」「訓練をしていなかったら」と思うと、今も恐怖だ。

企業は従業員の命を守ることが第一。訓練は真剣に繰り返し行い、体に覚えさせる。私は「偉大なるマンネリ化」と言っている。

自然災害は繰り返す。自分の住む場所、働く場所の災害史を学び、「根拠のない大丈夫は大丈夫ではない」「万が一はあり得る」と心して備えたい。

（日鉄住金建材執行役員）

受講生の声

証言に胸痛んだ

いざという時、体が勝手に動くぐらい避難訓練を重ねておく「偉大なるマンネリ化」という言葉が印象的でした。津波からは命を守れたのに、その後の避難所生活で命を落とした高齢者がいたという証言には胸が痛みました。（仙台市太白区・山形大2年・19歳）

庄司菜々子さん

土地の知識重要

災害史を含めてその土地を知っておくことが重要と感じました。教訓は避難マニュアルに落とし込み、さらに訓練を積み重ねる。避難した先で命を落とすことがないように、要配慮者を意識した備蓄の大切さも知りました。（仙台市太白区・尚絅学院大4年・21歳）

小川真世さん

より真剣に訓練

生死を分ける避難を体験した2人の講話は生々しく、訓練はもっと真剣にしなければと思いました。組織を率いる人にはより高度な知識と意識が必要とも感じました。防災論としてはもちろん、リーダー論としても新鮮でした。（仙台市青葉区・会社員・25歳）

高橋萌絵さん

メモ　「次世代塾」は、河北新報社などが震災の伝承と防災啓発の担い手育成を目指して企画した年15回の無料講座。次回は19日。連絡先は同社防災・教育室＝メールjisedai@po.kahoku.co.jp

運営する311次世代塾推進協議会の構成団体は次の通り。河北新報社、東北福祉大、仙台市、東北大、宮城教育大、東北学院大、東北工業大、宮城学院女子大、尚絅学院大、学都仙台コンソーシアム、日本損害保険協会、みちのく創生支援機構